

径大の腸管を対側の口径に合わせて腸間膜側より切離する。腸間膜付着部側より全層連続縫合を始め、遺残したペッツは漿膜縫合で埋没される。現在までに7例に施行し、狭窄、縫合不全、皮下膿瘍等の合併症はなく全例経過は良好であった。

〔結語〕端々吻合を基本とした本法は手技が容易で術野汚染も最小限に抑え、有用な吻合法の一つと考えられた。

### 35. 腹腔鏡下虫垂切除術の検討

(板橋中央総合病院外科)

濱野美枝・松山秀樹・増田 浩・  
杉山勇治・吉田基巳・藤田 尚・  
小林慎二郎・高橋宏樹

〔背景〕1999年4月より当院では急性虫垂炎に対し腹腔鏡下手術を導入したので、開腹下との比較検討を行った。

〔対象・方法〕1999年4月1日～1999年12月31日の間に施行した腹腔鏡下31例と1998年の同時期に施行した開腹下33例を対象とし、手術時間、術後在院日数、創部感染の有無、コストの項目で検討を行った。

〔結果〕手術時間は腹腔鏡下の方が時間が長い、術後在院日数は腹腔鏡下で開腹下の約半分の日数となった。創部感染は腹腔鏡下はなかったが開腹下は6例認められた。病理組織別に比較すると壊疽性で差が顕著で、腹腔鏡下の方が術後在院日数も短く、コストも安かった。

〔考察〕腹腔鏡下虫垂切除術は入院期間が短く創部感染もないので、炎症の強い患者にとってはよい適応であると考えられた。

### 原発性大腸悪性リンパ腫の1例

(府中医王病院消化器科) 畑地健一郎・  
新井俊男・島田幸男・都筑康夫

大腸の原発性悪性リンパ腫は、比較的稀な疾患である。今回、我々は、盲腸原発悪性リンパ腫を経験したので報告する。症例は55歳の男性。主訴は腹痛、下痢。注腸X-P検査、大腸内視鏡検査、腹部超音波検査、腹部CT検査で、回盲部に腫瘤性病変を認め、回盲部の悪性腫瘍の疑いで、開腹手術を施行した。開腹時、腫瘍は回盲部の充実性腫瘍として認め、所属リンパ節も腫大していたため、大腸癌根治術に準じて回盲部切除術を施行した。病理組織学的にはnon-Hodgkin's lymphoma, LSG (lymphoma study group) 分類のdiffuse large cell typeであった。免疫組織化学染色では、抗B-cell抗体陽性細胞がびまん性に認められ、B-cell由来で

あった。術後CHOP療法を施行し、現在再発、転移を認めず、外来で経過観察中である。

### 大腸悪性リンパ腫の1例

(多摩南部地域病院外科)

板倉紀子・菊池友允・重松恭裕・  
鈴木隆文・太田正穂・中村明央・  
岡本史樹・栗根康行

今回我々は盲腸原発悪性リンパ腫を経験した。

症例は72歳男性。右下腹部痛の精査で病変指摘され当院を受診した。1型の回盲部癌が疑われたが、形態が特徴的でないと生検で確信がつかないことより壁外性腫瘍も否定できず、回盲部悪性腫瘍の診断で開腹した。術中所見はSS H0 P0 N0 Stage 2 D3 Cur Aであった。標本は3cm大の腫瘍で病理組織検査でnon Hodgkin B cell lymphoma diffuse medium type ss h0 p0 n0 Stage 2であった。

大腸悪性リンパ腫は50～60歳代の男性に好発し、全大腸悪性疾患の約1%である。回盲部に好発し直腸、上行結腸の順である。形態が多彩で変化しやすく、腫瘍の大きさに比し局所の管腔の伸展が良好で、生検で確信が得られにくいのが特徴である。

今回の症例はNaqvi分類でStage 1であり、手術療法のみで根治が得られたと判断され、予後の期待できる症例と思われる。若干の文献的考察を加えここに報告する。

### Crohn病術後小腸癌を合併した1例

(<sup>1</sup>廣瀬病院, <sup>2</sup>八王子消化器病院)

小田和理恵<sup>1</sup>・菊池哲也<sup>1</sup>・廣瀬哲也<sup>1</sup>・  
廣瀬廣人<sup>1</sup>・鈴木 衛<sup>2</sup>

57歳女性、Crohn病40年経過後小腸癌を合併した貴重な症例を経験したので報告する。3カ月の閉塞症状が改善せず、Crohn病による腸閉塞の診断で開腹したところ、膀胱浸潤を伴う小腸癌を認め小腸部分切除および膀胱合併切除を施行した。過去の文献では海外および本邦をあわせ104例のCrohn病合併小腸癌の症例報告がみられた。Crohn病20年以上の経過症例において小腸癌の合併が回腸に多くみられ、長期経過症例で一時寛解していたものが再度閉塞症状をきたしたとき、小腸癌の合併を念頭においた精査の重要性がわかった。

### 胆石、急性胆嚢炎を契機に発見した Choledochoceles の1例

(浩生会スズキ病院外科, \*東京女子医大附属消化器病センター外科)

穂上 崇・桜井 明・平野 宏・  
鈴木浩之・原田信比古\*

山口典久・菅谷洋子・和久茂仁・  
小原靖尋\*・福田武隼\*

〔症例〕59歳男性。〔主訴〕心窩部痛，悪心，嘔吐。〔現病歴〕1999年11月10日より主訴が出現した。15日東京女子医大病院外来で胆石の頸部嵌頓と診断され，当院に緊急入院となった。PTGBDを施行し，胆嚢頸部に結石，総胆管末端に径約10mm大の囊腫様病変が認められた。胆管や囊腫内に結石や腫瘍性病変は認められず，胆嚢内胆汁中アマラーゼ，血清CA19-9の上昇はみられず，胆嚢摘出術のみ施行した。術後ERPで膵管と囊腫との交通はみられなかった。内視鏡検査では乳頭の緊満状態から平低化までの経時的変化も観察可能であった興味あるcholedochocoeleの1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

#### 肝内外結石に対するヘキサメタリン酸ナトリウムの有効性について

(済生会栗橋病院内科，\*同薬剤部，\*\*東京女子医大消化器病センター)

春山航一・福屋裕嗣・新浪千加子・  
梁 京賢・片山 修・嶋村正典\*・  
片山 晃\*・土岐文武\*\*

以前ビリルビンカルシウム石の溶解剤としてヘキサメタリン酸ナトリウムが使われていたが，内視鏡的採石術の進歩により使用されない。今回，内視鏡的採石術が困難な症例に本剤を併用し，有効性を経験したので報告する。

〔方法〕ヘキサメタリン酸ナトリウム50gに注射用水900mlを加え作製し，ENBD tubeより1日2回100ml/4hで投与した。

〔症例〕胆管炎で入院し，肝内外胆管に結石が充満していたが，傍乳頭憩室のため乳頭の正面視が難しく，碎石バスケット挿入が困難なため，初回はEPBD，ENBD tube留置のみとなった。本剤を10日間投与し，その間採石術を2回施行し，ほぼ結石を除去し胆管炎は改善した。

〔まとめ〕内視鏡的採石術にヘキサメタリン酸ナトリウムを併用することで，①採石回数が軽減した，②碎石バスケットを使用せず治療できた，③肝内結石に対する有用性が示唆された，④明らかな副作用を認めなかった。

#### 悪性疾患に伴う胆道閉塞に対するExpandable Metallic Stentの使用経験

(福田記念病院内科，\*同外科)

橋本 敬・柳澤伸嘉・伊藤譲治・

1998年8月より1999年11月までに6例の悪性疾患に伴う閉塞性黄疸の手術不能例に対し，経皮的胆道ドレナージ術後にexpandable metallic stentの留置を行った。6例の平均年齢は74.8歳，男女比2:4，その内訳は胆管癌3例，膵臓癌2例，胆嚢癌術後再発1例であった。全例stent留置後退院しており，術後平均生存期間は223.8日で，再閉塞を起こしたのは6例中1例，平均開存期間は170.4日であった。6例中3例の死亡例があるが，同例は死亡時stentの閉塞は認めなかった。手術不能な閉塞性黄疸に対する経皮的胆道ドレナージ術後のexpandable metallic stentによる内瘻化は患者のQOLの向上に有用であると思われる。

#### 進行膵臓癌に対する動注併用放射線治療

(東京慈恵会医大放射線医学講座)

中川昌之・兼平千裕・小林雅夫・  
本田 力・関根 広・福田国彦

1978~99年の間，111例の膵臓癌に対する放射線治療が行われ，IORT，温熱療法，術前照射など工夫もされていたが長期生存は困難であった。そこで最近，動注治療併用で照射を行い，その効果とQOLをみた。施行例は7例で，治療併用は局所濃度を高める目的で動注とした。治療後の評価は画像上，PR2例，NC4例，PD1例であり，腫瘍マーカーは高値を示した4例で半減以上低下した。QOLは外泊や外来治療の妨げにはならず，また症状改善しPS向上は4例にあった。なおPRの1例は，照射後のdown stageが得られ切除可能となった。今後，本法の適応，本法施行後の成績と切除可能性等を検討したいと考えている。

#### 悪性膵島腫瘍の1症例

(谷津保健病院外科)

鬼澤俊輔・宮崎正二郎・藤田 徹・  
森山 宣・小暮晃子・平山芳文・  
糟谷 忍・御子柴幸男

症例は73歳女性で，1999年9月他医健診の腹部超音波検査で膵体部に4cmの腫瘍を認め，精査加療目的で紹介された。血液検査ではグルカゴン値が201pg/mlと軽度上昇を認めた。腫瘍マーカー他の異常は認めなかった。USでは膵体部にhypoechoic massを認めた。CTでは造影早期相で比較的均一に染まり，周囲は被膜様に濃染され，晩期相まで淡く造影される腫瘍を認めた。Angioでは，血管新生像，淡い腫瘍濃染像と脾静脈の圧排を認めた。ERCPでは，体尾部の主膵管の途